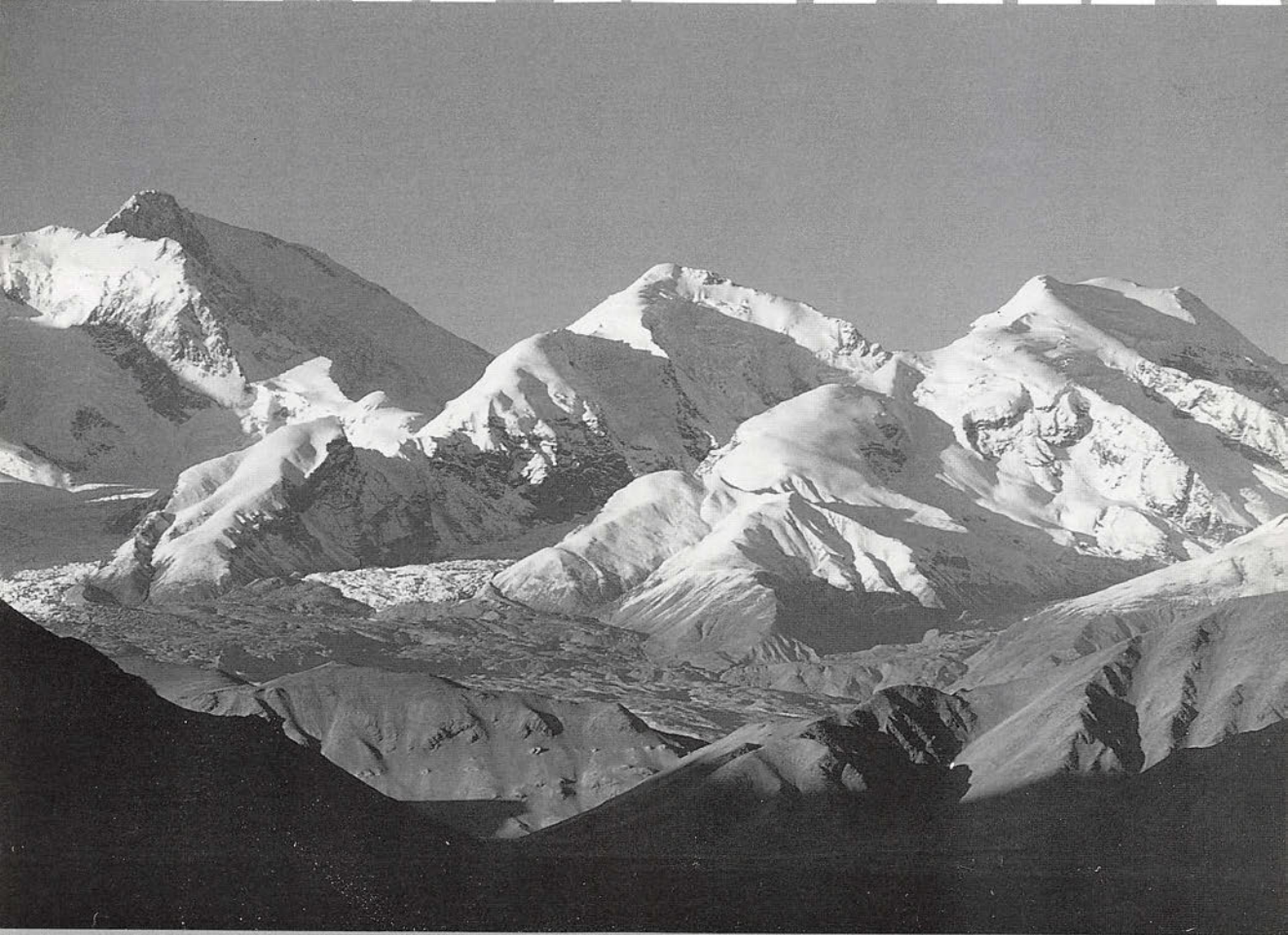


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 284



1995 JULY



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

日本ヒマラヤ協会

1996年登山隊員募集

玉珠峰 (6,179m)

世界の屋根である青藏高原に美しいスノーピークがあります。短い期間で高峰にアイゼンをきしませたいと考えておられる方のために22日間のキャンプを企画しました。(H A Jでは既に2度登頂)

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期 間:1996年7月21日～8月11日(22日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:60万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J事務局

ムスターグ・アタ (7,546m)

シルクロードのド真中、パミール高原にどっしりと腰を据えて聳え立ち現地に住む人々から「氷山の父」として親しまれているムスターグ・アタでサマー・キャンプを行います。なお、アタを舞

台としたサマー・キャンプはこの年をもって最後とする予定です。

記

1. 期 間:1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先:H A J事務局

ヌン (7,135m)

インド・ヒマラヤのサマーキャンプとして、1996年夏もカシュミール・ヒマラヤで開催します。

カシュミールの盟主ヌンの高峰登山とラダックの素晴らしい雲上のヒマラヤの旅が楽しめます。

記

1. 期 間:1996年7月21日～8月25日(36日間)
2. 隊 員:10名
3. 費 用:75万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

中国・新疆のタクラマカン砂漠の彼方、西方には幾つもの雪嶺が連なる。ウルムチからカシュガルに飛び、スバシに移ると美しいコンゲール(7,719m)の秀峰が眺められた。

(谷田川 武)

ヒマラヤ No.284

- | | |
|---------------------------------------|------|
| 1. カラコラムの氷河(2) | 井上重治 |
| 14. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉 | |
| 17. 新しき土地の古道を往く(2) | 岩崎 洋 |
| 20. 中国高峰登山15年小史(4) | 山森欣一 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

カラコラムの氷河(2)

井上重治

5. 私の氷河トレッキング

日本では見られない氷河の上を歩いてみたいという単純な動機で私はカラコラムを訪れた。氷河は南極はもちろん、アルプスやヒマラヤにもたくさんあるが、素人が簡単に歩ける所は少ない。ところがカラコラムではそれが可能なのである。氷河の近くまでジープで行き、それから1日乃至2日で氷河にたどり着ける。

1992年春に初めてパサー氷河を横断した。パサー

氷河はグレート・カラコラムの西端、バツラ山群に属し、パサー・ピーク(7295m)から垂れ下がり、東へ向かって流れる長さがほぼ28kmの中規模氷河である(写真3A)。カラコラム・ハイウェイからも間近に眺められる。この氷河の流速は1日あたり43cmと報告されている(1957年)。パサー氷河のトレッキングは通常ボリド湖畔の夏村からパサーギャル(3000m)を経て2日行程でラズダール(3500m)に至る放牧ルートをとる。最初はパサー氷河右岸のジープでも通れるような



▲写真3A パサー氷河の流れ(ラズダール上流、1993年4月)

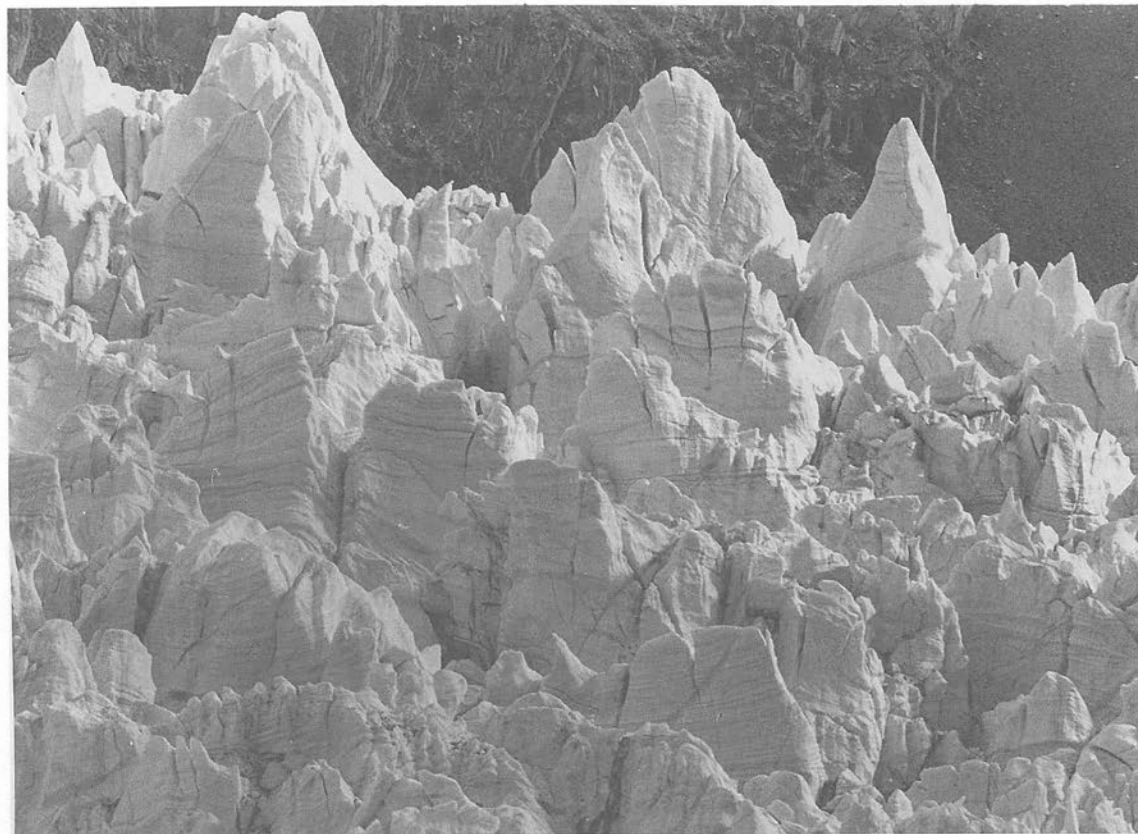
立派な道をたどるが、やがて土砂崩れで道なき道になり、落石の絶えないガラ場を、下の氷河を気にしながらトラバースすればバスーギェルに着く。ここからはバスー氷河のアイスフォールが眼下に眺められる。特に朝、夕の斜光に光るセラックの縞模様が透き通るように白く浮き上がり、一つ一つの氷塔が踊っているような幻想的な光景を演出する（写真3B）。

バスー氷河の横断はこのアイスフォールの上部の傾斜がゆるくなった所を選んで行すが、それでもルートファインディングは春先のシーズン始めということもあって現地のガイドやポーターも時々ルートを間違えて引き返すことがあった。取りつきの数メートル前後の氷丘の連なりを抜けると、中央部は比較的平坦で、クレバスも少なかったが、氷の上を無数の清流が流れているのには初心者の私はびっくりした。こんな所を毎年たくさんの山羊や羊が横断するとはとても信じられない。

少し慣れてくると、一面に広がる氷の上にも色々な模様や特徴的な構造物のあることに気がついてくる。気泡のない透明な氷と気泡の入った白っぽ

い氷の互層からなるきれいな縞模様美、真っ青な融水が音をたてて氷の溝を流れ、やがて勢いよく大きな穴（ムーラン）に流れ込む壮観な光景。氷上の黒い粒子が太陽を吸収して融解した後にできる凹凸（クライオコナイト）はまるで散弾銃を打ち込んだようなあばた面である。テントを張ったような珍しい氷の屋根もあった。氷の小山へ登ると、眼下に融水ができた真っ青な透明池が出現して息をのんだ。氷塔が林立している所にくると、あたりはまるでおとぎの国のようにきらびやかになった。

時折、氷壁にガイドがピッケルでステップを切ってくれたが、その際に飛び散る氷片が下で待ち受ける私のほほにふりかかって緊張を強いられた。氷河トレッキングには色々な危険があるが、その最たるものはクレバスへの転落であろう。私の知っている著明な弁護士はかつてナンガ・パルバット南面のルパール谷のトレッキングに参加され、初心者でも容易に渡れるというタラシン氷河で不幸にもクレバスに落ちた。恐らく土砂か雪で隠されたクレバスで、小用のためにちょっとコースをは



▲写真3B 幻想的なアイスフォールのセラック帯（バスー氷河にて、1993年4月）

ずれたために陥落したが、幸いなことに背負っていたザックがクレバスに挟まって九死に一生をえた。ただ骨折で数ヵ月入院生活を強いられた。一般に氷河の消耗域では新雪さえなければ滅多にクレバスの罠にはまることはない。しかし、不気味な青黒い口を開けたクレバスを飛び越えるには私のような素人はかなりの覚悟がいる。油断がないのは、土砂にうすく覆われた黒い氷で土の上を行くつもりで気楽に歩くと足元をすくわれて見事に転倒する。

対岸のラズダールには小さく開けた牧草地があって、夏村に使う石室が建っていた。このラズダールの上流300mくらいの所に写真4に示すような先の尖った真っ黒い巨大な氷塔が数個立っていた。高さは数十メートルあってゆうにラテラル・モレーンの高さを越していた。この大入道はあたかも汗をかいたように融水をばたばた落とし、時折抱え込んでいた丸石を身震いでもするように下へ落としていた。氷河学の権威である国立極地研究所の渡辺興亜博士に相談したところ、この氷は氷河の底にあったものらしい。近寄ってよく観察すれば底面滑りによる擦り傷が見える筈だという。さらに通常氷が白く見えるのは取り込まれた無数の気泡の反射によるもので、超高压下で気泡の追い出された氷は透明なために光を吸収して黒く見えると教えられた。そういえば、この巨大な黒塔の基部に白い氷がひっくり返って地上に露出したとすれば、このパスー氷河には底面滑りの大きな変動があったことになる。調べてみると、これらの黒い氷塔の乗っている基部は現在の氷河の水面より20mくらい高く、ちょうどラテラル・モレーンと水面の中間の高さにあった。(写真5)。さらにこの真っ黒い氷と砂礫の層はラズダールの上流からパスーギャルの下流まで右岸と左岸にずっと続いていて、明らかに現在の氷河の流れからは完全にはずれていた。ということは、かつて氷河面がここまで盛り上がっていたことになる。先に述べたブアルタール氷河のサージの場合にも高度3000m地点に低下した現在の氷面に取り残された氷の残骸が認められた。さらに注意してみると、この黒い層と現在のラテラル・モレーンとの間にもう一つ氷河で削られた層があり、もっと以前の氷河の

隆起でつけられたものと思われた。

フンザ出身のガイド、ハッサンに聞くと、このパスー氷河は7年周期で前進と後退を繰り返し、現在は後退期にあるという。氷河末端の動きと直接結びつくかどうかは不明であるが、少なくともサージまたはそれに類した現象がこのパスー氷河に最近起こったことは確かである。先程の黒い氷塔もサージでよく見られる先の尖った特有の形をしている。さらにラズダール近くの黒い層の近くには深い緑色をした濁り池があった。サージの際には氷河の底から吹き出た水でこの種の池ができることが知られている。この不気味な水を一週間近く毎日飲んでいた。

氷河の専門誌を調べた限りではパスー氷河がサージ氷河であるという報告はないが、雪崩で涵養される中規模氷河であること、サージ氷河の集中しているグレート・カラコラムにあることからパスー氷河がサージ氷河であっても不思議ではない。

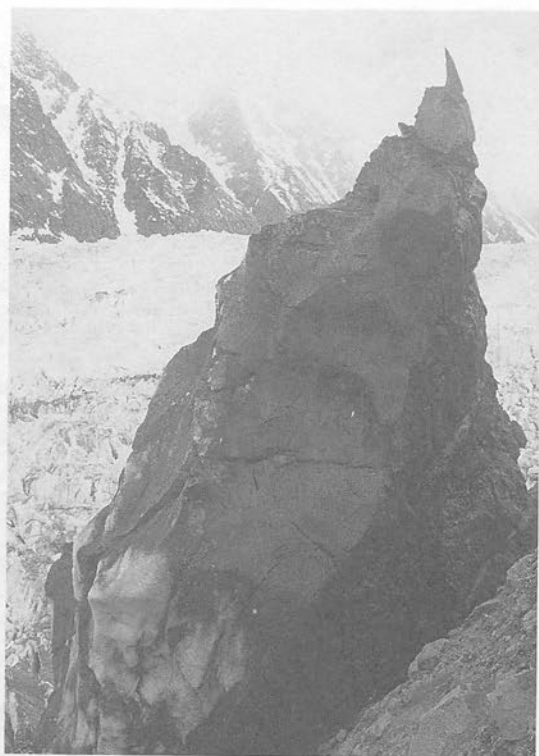


写真4 パスー氷河に見られた巨大な黒い氷塔
(1993年4月)

サージに特有な先の尖った形をしており、左下に白い氷をつけている。右側面には底たい石と思われる丸石が列をなしてついている。

地形的にもサージ氷河として知られているブアルタル氷河ときわめて近似しており、パスー氷河の涵養域にあたる上流がきわめて広く、右に曲がる中、下流が狭まっている。したがって上流部に堆積した水が地形的な制約でスムーズに流れることができずに膨れあがり、そのためにエネルギーが蓄積して7年くらいに一度サージのように押し出してくる可能性は否定できない。7年という周期は確かにサージとしては短い、パミールのメドベジイ氷河は12～14年の周期でサージが起こるといわれている。

なおサージに近い現象として、バツーラ氷河では氷河末端の激しい氷の消耗を補うために、異常流動（エマージェンシー・フロー）により氷が波のように補給され、このため一時的に氷表面が上下するといわれている。パスー氷河の最大の特徴は源流から末端にいたるまで全く岩屑のデブリのないことで、このため夏期の氷の消耗はデブリに

覆われた他の氷河よりはるかに多いと予想される。従って激しい異常流動が起こる可能性は高い。いずれにしてもパスー氷河が本当にサージ氷河であるかどうかは専門家の判断に待たなければならないが、未知のサージかも知れないと考えるだけで、私のような素人は血がたぎり胸がわくわくするのである。

パスー氷河で一週間近く過ごした後で、今度はフンザ河を渡ってナガール地区のブアルタル氷河を訪れた。この氷河はディラン（7266m）とミアル・ピーク（6824m）を結ぶ稜線を源流とし、北へ向かって流れる長さ20kmの中規模氷河で、すでに述べたようにサージ氷河として知られている。ナガール地区の73の集落のうち最高所にあるホバル村（人口、4000人）の間近にあり、パスー氷河よりはるかに人間臭のする氷河である。実際ホバルの住民は毎日この氷河を渡って対岸のシスキン側へ燃料になる薪をとりに行き、家畜の放牧をし



写真5 パスー氷河の氷面の盛り上がった跡（1993年4月）

現在の氷面より20mくらい上がった、氷河とラテラル・モレーンのちょうど中間の位置に黒っぽい氷と砂礫の残骸が見られた。巨大な黒い氷塔はこの上に乗っていた。

ている。氷河のスケールはパスー氷河より小さいが、荒々しさは変わらない。ホバル村でも最奥のホームシャル（2920m）まではジープが通じているが、ここからブアルタル氷河（地元ではホバル氷河と呼んでいる）に降りるためには、いきなり傾斜55度のガレ場をじくざぐに150mも下りなければならない。これには慣れない人はたいていびっくりして足がすくんでしまう。おまけに路なかには小石がごろごろしており、うっかり踏もうものならローラースケートよろしく下へ落ちるような恐怖感にとらわれる。しかし、ブアルタル氷河に通堯した地元のガイド、ナビーを新規に雇ったおかげで、私は安心して下りることができた。

やっとのことで氷河の縁までくると、今度は非常に不安定な土砂に覆われた大石をたどって氷河の中心部へ向かう。氷の表面が不安定なので毎日道が変わり、山羊や羊がスリッパしてクレバスに落ちることも珍しくないという。パスー氷河に比

べて岩屑が多く汚い感じである。ただ岩屑の上に無数の氷の角錐（アイスピナクル）が林立しているのが特徴的であった（写真6）。岩屑が輻射熱を吸収して下の氷を溶かすのに対して、アイスピナクルは光を反射して融けるのが遅いためにできる。一見雪のように見えるのでつい日本の山にいる積もりで靴で崩そうとしたが、鋼鉄のようがっしりしていて簡単にはねかえされた。当然といえば当然で、あとには私の足の痛みだけが残った。氷河の真ん中へんに氷をくり抜いて造った自然のトンネルがあり、透明な水が音をたてて流れていた（写真7）。上流を見ると、ブアルタル氷河の広大な源流が見え、その左岸よりかなりの岩石が積もっていた。1986年の岩なだれはサージが終わった1988年にはまだホバルの上流3kmの地点にあり、5年後でもまだ2km上流あたりにいる筈であった（写真8参照）。

幅450mの氷河を渡り、対岸のシスキン側へ着



写真6 ブアルタル氷河の三角錐の氷（アイス・ピナクル）（1993年4月）

尖った氷は太陽を反射して融けないが、回りの岩屑の乗った輻射熱で早く融けるためにアイス・ピナクルは目立って成長する。この現象は実験室で再現できる。

く直前に直径5 mくらいの黒い氷塊が流れに沿ってたくさん並んでおり、その外側には緑色をした濁り池が数個あった（写真9）。恐らくこれは1987年のサージの残骸と思われる。

シスキンのややゆるやかな傾斜（35度）に付けられた谷を登ると、荒涼とした台地に着いた。たくさんの山羊や羊が放牧されていて、草など生

えていない不毛の地面をあさって何やら食べていた。岩小屋が一軒建っていて、薄暗い小屋の中で牧人が一人山羊の乳からバターを作っていた。ブアルタール氷河とバルブ氷河に囲まれたこの地区はかつて40～50家族が住みついて農業を行っていたが、灌漑水を採っていたバルブ氷河の氷面が過去20年間低下を続けて自然流路による氷河の融水



写真7 ブアルタール氷河で見かけた氷のトンネル（1993年4月）

を利用できなくなった。加えてブアルタール氷河の浸食で写真10に示すように氷河の縁沿いに20kmに渡って岩崖の大崩壊と地滑りが起こり、約10平方キロのテラス耕地がなくなって離村に追い込まれた非情な歴史を負っている。氷河地域で生活する人々が氷河の動向でいかに大きなインパクトを受けるかを切実に感じた。

シスキンと同じように灌漑水の不足に悩んだカラコラムのシャイオク河上流の村、クスネでは羊の革袋に詰めた水と糞を交互に積み重ねて冬の寒さを利用して人工の氷河を作った。ここから得られる水を40年間も夏の畑の灌漑に利用したという。1914年の話である。(樋口敬二、氷河への旅)。

シスキンからガレ場を登ってバルブ氷河に出た。この氷河は下流でブアルタール氷河に合流するが、面白いことにシスキン付近ではブアルタール氷河よりは数百メートルも高い所を流れている。バルブ氷河の消耗域はブアルタール氷河と異なって一

面厚いデブリに覆われていて、まるで広い乾燥地のような錯覚におちいる。所々出会う氷河湖がなければとても氷河の上とは思われない。ガイドによると、バルブ氷河の湖は場所によって七色変化ならぬ三色の異なった色を示すという。枝氷河から流れ込む金属イオンのいたずらであろうか。鉄腕モトム高所登山学校の大宮求さんによると、インド・ヒマラヤのチャトランギ氷河では四色の中央モレーンが並んで流れているという。

バルブ氷河の左岸につけられた牧人の道を登って行くと、氷河は次第に本来の白さをとりもどしてきた。この上流にミヤール氷河がある筈であるが、そこまで行くにはまだ2日はかかると聞いて、スパンティーク（現地ではゴールデン・ピークと呼んでいる）の大絶壁の見える所（3800m）から引き返した。

1994年6月にはレッサー・カラコラムのマシャブルム周辺の氷河を訪れた。フーシェから半日行



写真8 ブアルタール氷河の上部（1993年6月）

広い源流が左に曲がったあたりより左岸に土石の堆積が見える。1986年の大崩壊の一部かと思われる。

程で着くセイチョウを基地としてチャラクサ氷河とゴンドゴロ氷河を歩いたが、前年の荒々しいパス氷河やブアルタール氷河と比較すると、嘘のようにおとなしい氷河であった。もちろんアイスフォールや氷河湖はあるが、下流部の岩屑の堆積が多く、サージの痕跡も認められなかった。ゴンドゴロ氷河はビアルチュディ（6781m）山群を源流として、南西から南へ流れる18kmの折れ曲がった氷河で、ここ何十年間前進も後退もせず、一見眠っているように停滞したままである。といっても氷河はちゃんと流れているが。

チャラクサ氷河はK 7（6924m）、リンク・サール（7041m）、K 6（7282m）を結ぶ稜線を源流とし、西へ向かって流れる長さ16kmの中規模氷河である（写真11）。アイスフォールの上の中流部は比較的平坦で歩き易い。といってもさすが氷河の上だけあって、いたる所にクレバスが走り、そこに多量の融水が音をたてて流れこんでいた。こ

のチャラクサ氷河の特徴は樹枝状に多数の枝氷河が合流した結合氷河であることである。一般に氷河は直進する性格と合流しても川のように混じり合わない性質があるので、二つの氷河の合流点の応力は複雑である。チャラクサ氷河と北大氷河、チョゴリ氷河などとの合流点には各々の氷河が運んできた堆石による中央モレーンが造られるわけであるが、その盛り上がりは顕著ではなく、その代わりに写真12に示すように見事なテーブルストーン（氷河卓）がたくさん見られた。みんな角張った石で、一辺が数mを越える巨岩もあった。中村純二博士によると、ここのテーブルストーンの夏の寿命は約1～2ヵ月で、石を支えている氷の柱がやせ細って潰れると、また石の周囲の氷が先に融けて再びテーブルストーンが形成されるという。このおとなしいチャラクサ氷河も源流近くになると巨大なクレバスがたくさん待ち受けていて緊張させられたと中村博士は述べている。



写真9 ブアルタール氷河のサージの跡（1993年4月）

シシキン側に見られた黒い氷塊と濁り水の溜まり。左上隅に氷河のサージの浸食と思われる跡が見られる。

ここでは氷河自体の魅力よりも氷河に削られて磨きあげられた岩壁の迫力に心を奪われた。まるで紙やすりで磨き上げたかのような硬い花崗岩の壁がチャラクサ氷河のアイスフォールの上に聳えていた（写真13）。昼夜を問わず氷河がぎしぎし岩壁をきざむ音がするような錯覚を覚える。周囲には円錐や角垂状の針峰がたくさん聳え、さすがコンダス針峰群と名付けられただけのことはあった。その中でもひととき異彩を放っていたのがK7ベースキャンプ（4400m）から見たネザーピーク（写真14）で、ほれぼれするほど氷河によって磨きこまれた三角錐の岩頭にちょこんと小さな帽子のように雪が乗っていたのが印象的であった。

6. おわりに

日本では氷河は遺跡としか見られない。生きている氷河を見たいという単純な動機でカラコラムを訪れたが、なんといってもその悠々な流れと圧

倒的な破壊力を目の当たりにして畏敬にも似た感銘を受けた。そこには人工物では決して得られない奥深い自然の野性美が感じられた。氷河は年単位でゆったりと流れており、仮に50kmの氷河が年100mの流速で流れるとすると、源流から末端までは500年かかることになる。今私が見ている氷はもしかしたら北条早雲や武田信玄が生きていた頃に降った雪からできたかも知れないと考えると感慨はひとときである。一方、どんな頑強な岩も削りにとってベルトコンベアーのように数十キロも運んでしまう氷河の壮大な力に魅せられると、「だんだん自分の存在が無意味に思われてくる」（マーク・トウイン）。様々な応力に変化してやまない氷の色と形、「神の偉大なノミ（ルイ・アガシ）」で造りだす鋭い岩峰と深い谷、みずから築いたモレーンに配置する絶妙な花模様などの外的な美しさに加えて、氷河の内部にはサージ現象を始めとして、未知の神秘が隠されている。塚本珪



写真10 ブアルタール氷河のシスキンの崩壊地（1993年4月）

かって40-50家族が暮らしていた農耕地が氷河の浸食で崩壊して定住できなくなり、今は家畜の通路にしかなくなっている。

一氏は「カラコラムは麻薬のようなものだ」と形容したが、麻薬の主成分の一つは氷河の魅力のように思われる。氷河に関する知識を若干でももってトレッキングすれば、今まで知らなかった新しい喜びを得られることを身をもって体験した。この小文がこれからカラコラムへでかける方に多少でも参考になれば望外の喜びである。

*

日本には氷河がないという自明の理で、私のような全く門外漢が日本で入手できる氷河情報は極めて少ない。都内の大型書店へ行っても氷河関係の新本はまず見当たらないし、外国文献を備えた所も限られている。とりわけカラコラム氷河に関するものは少ないので人知れず苦労した。この意味で、貴重な氷河情報の便宜をご教授をいただいた国立極地研究所の渡辺興亜博士および東大名誉教授の中村純二博士に衷心より感謝する。また貴重な図書の閲覧をお許しいただき、氷河の名前についてご指導下さった日本ヒマラヤ協会の山森欣一、尾形好雄氏に厚く感謝する。

写真12 チャラクサ氷河右岸に聳えるネザーピーク（1994年6月）

氷河で磨かれながら隆起した三角錐の花崗岩

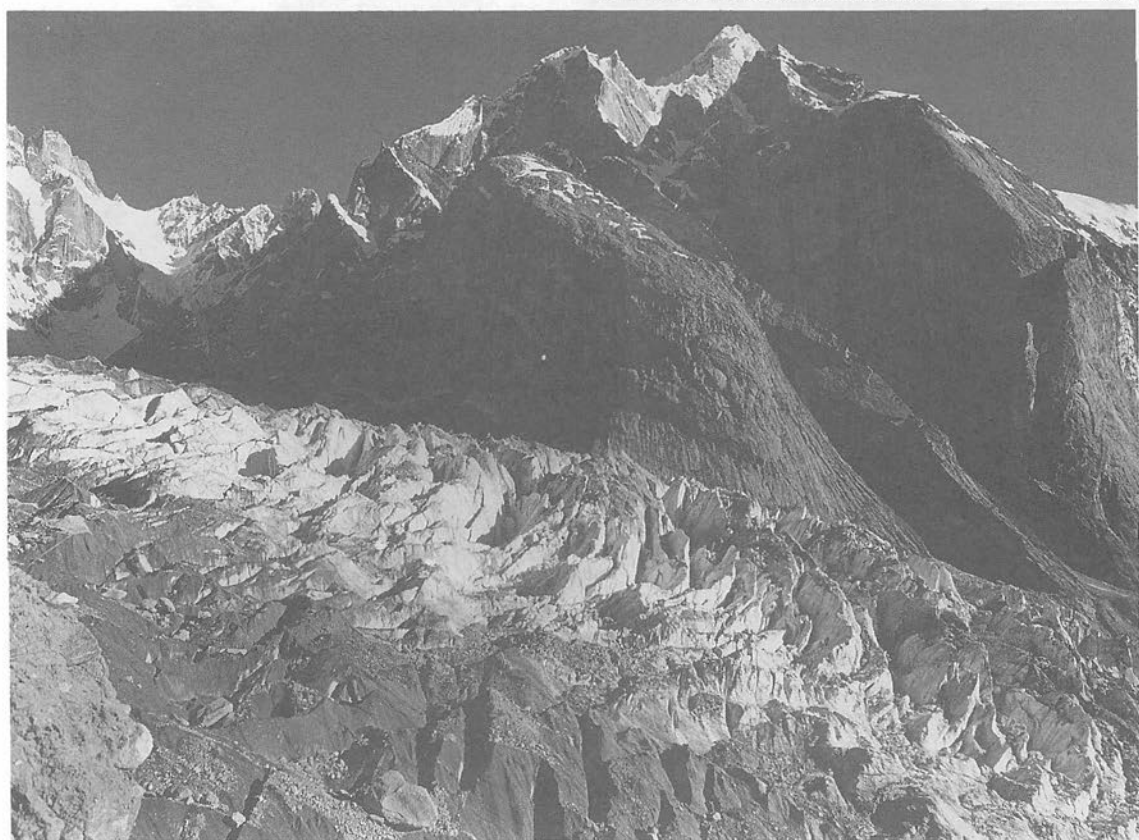
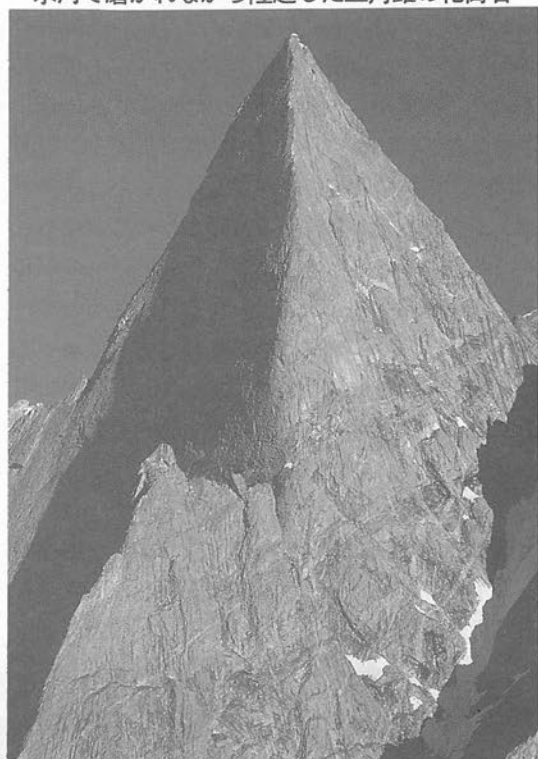


写真11 チャラクサ氷河の流れ（中流のアイスフォール、1994年6月）

カラコラム氷河文献

カラコラム氷河全般

- 1) J.H.Mercer : Glacier variations in the Karakoram. Glaciological Notes, 14, 19-33 (1963)
- 2) K.Hewitt : Glacier surges in the Karakoram Himalaya (Central Asia). Canadian J. Earth Sciences, 6, 1009-18 (1969)
- 3) J.H.Mercer : Glaciers of the Karakoram, Mountain Glaciers of the Northern Hemisphere. Vol. 1, 371-409, Cold Regions Research a-

nd Engineering Laboratory (1975)

- 4) 安成哲三、藤井理行 : ヒマラヤの気候と氷河、東京堂出版 (1983)

- 5) B.Dey, D.C.Goswami : Application of remote sensing for seasonal runoff prediction in the Indus basin, Pakistan. Hydrological Applications of Remote Sensing and Remote Data Transmission (ed. B.E.Goodison), IAHS Publication No.145, 637-645, IAHS Press (1985)

- 6) L.A.Owen, E.Derbyshire : Glacially deformed diamictites in the Karakoram Mountains,

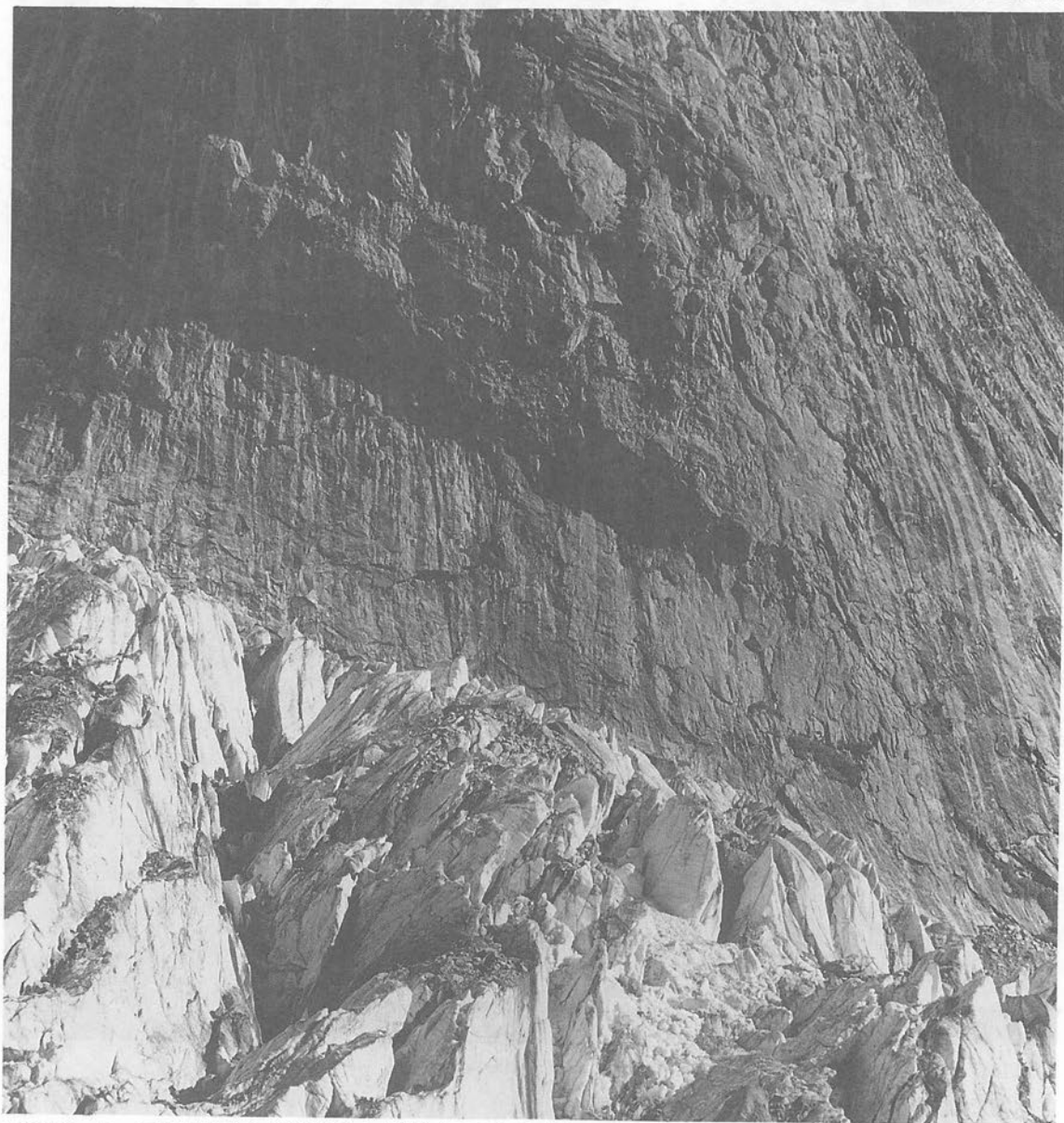


写真13 チャラクサ氷河で研磨された岩壁 (1994年6月)

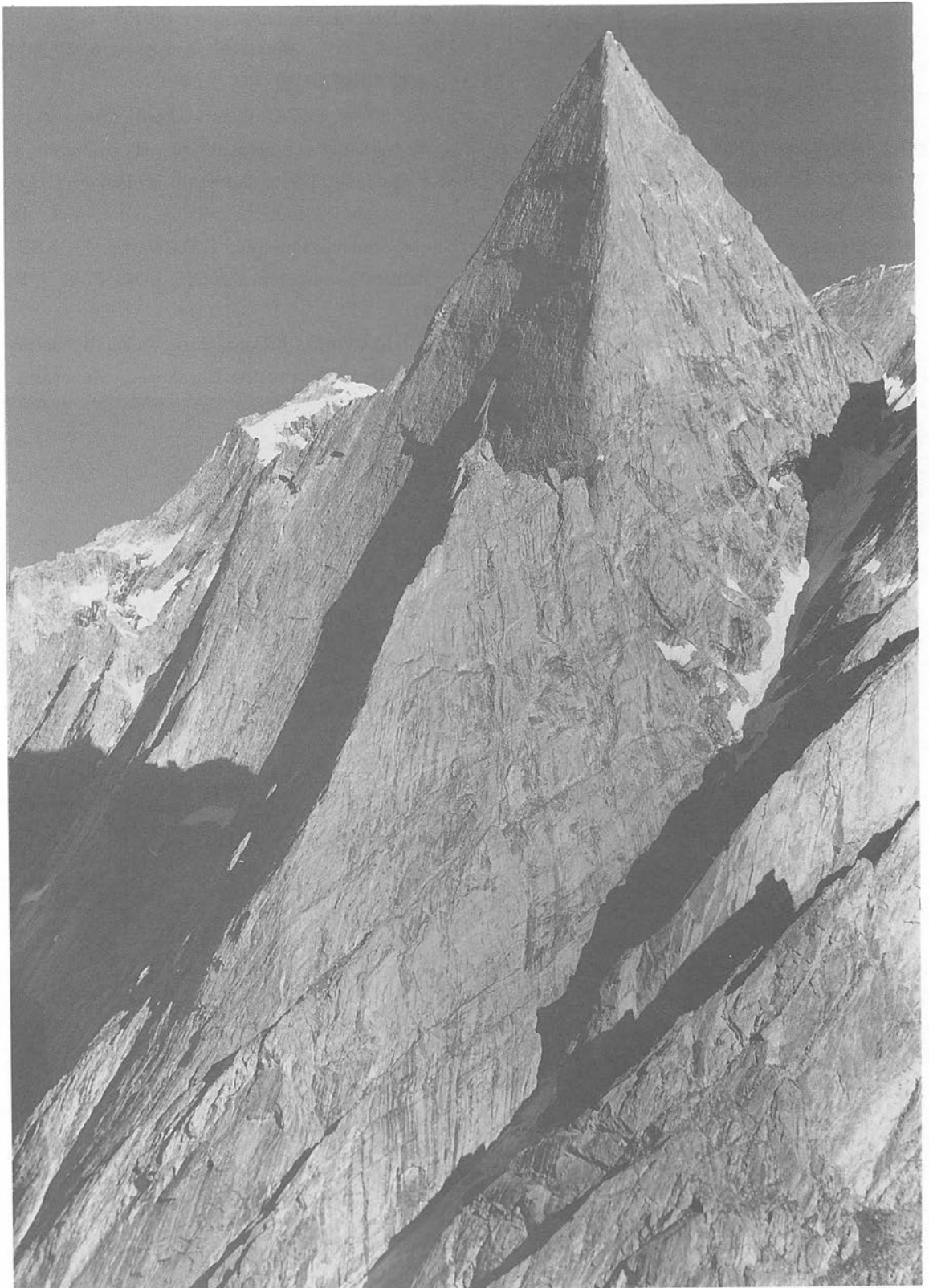


写真14 チャラクサ氷河右岸に聳えるネザーピーク（1994年6月）

氷河で磨かれながら隆起した三角錐の花崗岩。

northern Pakistan. Glaciotectonics : Forms and Process. (ed. D.G.Croot), 149-176, A.A.Balkema (1988)

7) C.P.Wake, P.A.Mayewski, M.J.Spencer : A Review of Central Asian glaciochemical data. Ann. Glaciology, 14, 301-306 (1990)

カラコラム氷河各論

8) A.Desio : An exceptional glacier advance in the Karakoram-Ladakh region. J. Glaciology, 2, 383-385 (1954)

9) W.Kick : Chogo Lungma Glacier, Geographical J. 122, 93-96 (1956)

10) R.Finsterwalder : German glaciological and geological expeditions to the Batura Mustang and Rakaposhi range. J. Glaciology, 3, 787-788 (1960)

11) H.-J.Schneider : Minapin-Gletcher und Menschen im NW-Karakoram. Die Erde, 100, 266-286 (1969)

12) 中国科学院蘭州氷河凍土研究所 : Professional Papers on the Batura Glacier, Karakoram Mountains. 科学出版社、北京 (1980)

13) K.Hewitt : Pakistan case study : catastrophic floods. Techniques for Prediction of Run off from Glacierized areas (ed. G.J.Young). IAHS Publications No. 149, 131-135, IAHS Press, (1985)

14) 中村純二 : 氷河、K 7 初登頂。東京大学スキー山岳部カラコラム学術登山隊1984年。75-96、東京大学山の会 (1987)

15) K.Hewitt : Catastrophic Landslide deposits in the Karakoram Himalaya, Science, 242, 64-67 (1988)

16) K.Hemitt, C.P.Wake, G.J.Young, C. David : Hydrological investigations at Biafo Glacier, Karakoram range, Himalaya ; an important source of water for the Indus River. Ann. Glaciology, 13, 103-108 (1989)

17) K.I.MacDonald : Impacts of glacier-related landslides on the settlement at Hopar, Karakoram Himalaya. Ann. Glaciology, 13, 185-

188 (1989)

18) C.P.Wake : Glaciation chemical investigations as a tool for determining the spatial and seasonal variation of snow accumulation in the Central Karakoram, Northern Pakistan. Ann. Glaciology, 13, 279-284 (1989)

19) G.J.Young, J.P.Schmok : Ice loss in the ablation area of a Himalayan glacier ; Studies on Miari Glacier, Karakoram Mountains, Pakistan. Ann. Glaciology, 13, 289-293 (1989)

20) J.S.Gardner, K.Hewitt : A surge of Bualtar Glacier, Karakoram range, Pakistan : a possible landslide trigger. J. Glaciology, 36, 159-162 (1990)

21) Ding Yongjian : Some glacio-micrometeorological features on the north side of Mount Qogir (K2). Karakoram mountains. Ann. Glaciology, 16, 67-72 (1992)

22) C.P.Wake, M.P.Searle : Rapid advance of Pumarikish Glacier, Hispar Glacier Basin, Karakoram Himalaya. J. Glaciology, 39, 204-206 (1993)

パンジャブ・ヒマラヤ氷河文献

1) W.Kick : Material for a glacier inventory of the Indus drainage basin-the Nanga Parbat massif. World Glacier Inventory, 105-109, IAHS-AISH Publ. No. 126, IAHS Press (1980)

2) J.S.Gardner : Recent fluctuations of Rakhiot Glacier, Nanga Parbat, Punjab Himalaya, Pakistan, J. Glaciology, 32, 527-529 (1986)

前号の誤字お詫びと訂正

1 頁左38行、統計→推計。11頁右1行、中付純二→中村純二。11頁右20行、消耗原→消耗厚。13 頁左28行、2、12→2.12m。同29行、0.62→0.62 m。同39行、10か→10ヶ。13頁右8行、納まりた→納まった。14頁左17行、一軒のまと→一軒の家と。

地域ニュース

《中国》

日本隊チョモランマ登頂

チョモランマ（英名エヴェレスト、8,848m）の北東稜と北稜（サポート隊）に挑んでいた日本大学エヴェレスト登山隊（平山善吉総隊長、神崎忠男隊長）は5月11日午前9時に登頂に成功した。

登頂したのは古野淳登攀隊長（34）、井本重喜隊員（32）の2人とシェルパ4人の計6人。

同隊は2月21日に日本を出発した後、2月24日～3月8日にかけてネパールのクーンブ地方で高度順化トレーニングを実施。

3月17日、カトマンズから中・ネ国境を越えてチベットに入り、22日BC（5,160m）を建設。

その後、31日にABC（6,300m）を建設し、4月14日にはC4（7,100m）を設けた。17日には第1、第2バットレスにルートを延ばし、C5（7,850m）に到達。29日に最難関のピナクル群を突破し、C6（8,350m）に到達した。

5月10日、8,560m地点にファイナル・キャンプC7を建設し、翌日登頂に成功した。

マロリーの孫も登頂に成功

1924年春、イギリスの第3次エヴェレスト隊でエヴェレストの初登頂を目指し、北稜ルートに挑みながら頂上に向かったまま消息を絶ったジョージ・リー・マロリーの孫、ジョージ・マロリーが祖父と同じ北稜ルートに挑んで登頂に成功した。

英国女性初単独登頂

英国の偉大な女性アルパイン・クライマーとして知られるアリスン・ハーグリーヴズ（33）が、5月13日女性として初めて無酸素、単独でチョモランマの登頂に成功した。ルートは北壁のC3（8,200m）から北壁上部で北稜へ回り、第2ステップを経て頂上に達した。

2児の母親でもある彼女、'94年の夏の3ヶ月間にアルプスの六大北壁をたて続けにソロし、同

年11月に冬同然のコンディションの中、グランド・ジョラス北壁クロ側稜の単独登攀に成功するなど過激な登攀を実践している。

アン・リタ9度目の登頂

チョモランマ（英名エヴェレスト、8,848m）の最多登頂者として知られるシェルパのアン・リタ（47）が5月13日に9度目のチョモランマ登頂に成功した。今回は、ロシア隊の4人に付き添い、チベットの北稜ルートからの登頂だった。

アン・リタは、1983年のアメリカ隊で初めて登頂してから、以来、チェコスロバキア（当時）、ノルウェー、韓国、スペイン、チリ、ネパール隊などと共に過去8回無酸素で登頂しており、今回も無酸素登頂であった。

「目標は10回。できれば最高齢登頂記録にも挑戦したい」と語る。

JAC隊マカルー登頂

日本山岳会（JAC）が創立90周年を記念して挑んだマカルー登山隊（重廣恒夫隊長ら14名）が5月21日と22日に相次いで登頂に成功した。

チベット側から未踏の長大な東稜にルートを求めた同隊は、春先の雪に苦しめられてBC（3,960m）を建設したのは3月30日であった。

4月4日にC2（5,180m）を建設した後、12日にBCの開村式を行い、以後本格的な登山活動に入った。

4月14日にC3（5,660m）、28日にC4（6,300m）、5月13日にC5（6,800m）と東稜上に順次キャンプを展開した後、日程の遅れなどから東稜ルートを放棄し、エスケープ・ルートに転進し、5月19日にC6（7,350m）、20日にC7（7,650m）を建設し後、21日に田辺治（34）、山本篤（32）松原尚之（30）、荒井俊彦（23）の4隊員が登頂した。

翌22日には、第2次隊として山本宗彦（35）、谷川太郎（27）、竹内洋岳（24）、小野岳（34）の4隊員も登頂に成功した。尚、第1次、第2次隊とも酸素を使用しての登頂であった。

《ネパール》

アンナプルナから滑降

ネパール観光省は5月3日、スロベニアの登山家がアンナプルナI峰(8,091m)からスキーでの滑降に成功したと発表した。

大滑降に成功したのはスロベニア登山家のカルニカ兄弟。4月29日に北稜から登頂し、登頂後、4,300mのベース・キャンプまで一気に滑り下りた。

ネパール首相へ牛の糞^{フン}り

カトマンズで5月14日午後、牛を食用に殺さず、保護を主張するヒンズー教徒の5千人集会に主賓として出席したアディカリ首相が、挨拶をしようとした際、興奮したヒンズー教至上主義者にイスを投げつけられた。際どいところでボディガードが首相への直撃を防ぎ、犯人は逮捕された。

アディカリ首相が襲われたのは、統一共産党が政権を握った去年11月以来初めてのことで、王家やネパールの伝統との共存を唱えて共産党政権をスタートさせたアディカリ首相だが、ヒンズー教至上主義者には、共産党政権はやはり伝統にそぐわないと映るようだ。

この事件に先立って、トラダール労働・保健相が最近、「イスラム教徒などヒンズー教徒でない人たちが牛を殺して食べようとするなら、殺害を禁じているネパール憲法にそのよう明記されねばならない」と発言した。

この発言が発端となって、ネパールのヒンズー教至上主義グループ「パシュパティ・セナ(パシュパティ軍団)」などが、発言は牛を食用に殺すことを容認するものだと、アディカリ首相に、同相の解任を要求していた。

ヒンズー教徒が人口の9割近くを占めるネパールは、インドの文化的、政治的影響を受けやすい。

パシュパティ・セナという名称はインドの極右ヒンズー教至上主義政党、シブ・セナ(シバ軍団)を意識し作られたもので、ご本家インドでも、ヒンズー教至上主義政党は、牛を食用に殺すことに

反対するキャンペーンを最近活発に続けている。

(5月16日 朝日新聞)

《インド》

東北大シニオルチューに登頂

東北大学医学部良峻山の会が創立15周年を記念して派遣したシッキムのシニオルチュー(6,887m)登山隊は、5月21日に日本人として初めてこの名峰の登頂に成功した。

同隊は佐藤春郎総隊長(74)、片山正文登山隊長(43)ら16名(含む学術隊)で、4月2日に先発隊(3名)が日本を出発し、9日に本隊が先発してシッキムに向かった。

ガントックからラチェンに移動した後、ラチェンからキャラバンを開始し、ゼム溪谷沿いに進み、シニオルチュー氷河の出合にBCを建設した。

其の後、昨年の偵察に基づいてルートをのぼし、5月21日の16時10分千田雅之(33)、太田尚志(26)の両隊員が登頂に成功した。2人は登頂後、6,640m地点でビバークし、翌22日に下った。

この登頂の第一報は、今春テント・ピークに挑んだオーストリア隊によってもたらされた。

尚、同隊の報告によると、今春の4月1日から登山隊隊荷の関税システムが変更になり、通関に大変苦労されたようである。

従来のようにCago Personal Sectionに送られた荷物には、80%の関税がかかるとうのである。

よく理解できないので現在調査中である。

トピックス

パンチェン・ラマの後継者

チベットの精神的指導者ダライ・ラマ14世のカトマンズ事務所が明らかにしたところによると、ダライ・ラマは5月14日、チベットで1989年1月に死亡したパンチェン・ラマ10世の後を継ぐ活仏として6歳のチベット人少年を公式に指名した。

この少年はチベットのナグチュ地区ラリに住むゲドゥン・チョエキ・ニーマ君で、1989年4月25日生まれ。ダライ・ラマは少年の両親との文通な

どを通じ、パンチェン・ラマの生まれ代わりと認めたという。同事務所によれば、すでにこの指名は、在インド中国大使館を通じて中国政府に通告されたという。

チベット仏教主要4派の中で、ゲレク派のダライ、パンチェン両ラマと、カギュー派のカルマパが指導者の生まれ代わりを認める活仏制度を採用しており、現在の各派の勢力では、パンチェン・ラマがダライ・ラマに次いで高い宗教的権威を持つとされている。

6年前に死亡したパンチェン・ラマ10世は、1959年のチベット動乱の際に国外に出ず、チベットにとどまった。66年から76年にかけての文化大革命では、10年間も獄中につながれた。釈放後は、中国のチベット政策を支持し、ダライ・ラマとは対照的な生き方をしたことで知られる。

パンチェン・ラマの死去後、中国政府はチベット政策の一環として、調査団を組織して生まれ代わりを懸命に探していたが成果が上がらず、同国政府は昨年から10歳のカルマパ17世を国慶節祝賀行事に招くなど優遇し、ダライ・ラマに対抗していた。

今回、ダライ・ラマ側が後継パンチェン・ラマを認定したのは、こうした中国政府のチベット政策の変化をけん制する狙いがあるとみられる。

ニューデリー発の新華社電による、在インド中国大使館のスポークスマンは5月16日、チベットの精神的指導者ダライ・ラマが中国・青海省生まれの少年をパンチェン・ラマ10世の後継者に認定したことを中国政府に伝えてほしいとの要請を拒否したと述べ、後継者を認めない中国政府の方針を示した。

ヒラリー卿にガータ勲位

サッチャー英前首相と、世界最高峰のエヴェレストに初登頂した(1953年5月29日)ニュージーランドのエドモンド・ヒラリー卿に、エリザベス女王からナイトの称号の中で最高位のガータ勲位が授与されることが、バッキンガム宮殿当局者から発表された。サッチャー前首相は女性としては2人目。

追悼

アダムス・カーター氏死去 (1919-1995)

35年もの長きにわたってアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集に携わってきたアダムス・カーター氏が4月1日に心臓病のため自宅で亡くなられた。80歳であった。

勝れた語学能力で世界中の登山家とネットワークを結び、それらのコミュニケーションによってAAJの内容を充実させてきた偉大なる編集者であった。

1934年にアラスカのクリロン(3,879m)に初登頂したのを皮切りにブランカ山塊で数多くの初登頂、新ルートの開拓を行う。

1936年には英米合同によるナンダ・デヴィ隊に参加。この時の初登頂から40周年を迎えた1976年にもW・アンソルドらと再びナンダ・デヴィに赴いている。

彼の死は世界中の登山界に巨星墜つのショックを走らせた。

インフォメーション

第40回藤江幾太郎・山の画展

期 日 7月1日(土)～7日(金)
11時～18時30分(日曜、最終日17時迄)
場 所 期日アートギャラリー(☎3535-7740)
JR有楽町駅、地下鉄丸の内線銀座駅C4出口。朝日旅行センター隣。
作 品 ネパール及び国内の山と旅で得た作品20点余の新作を発表

東京集会のお知らせ

6月の東京集会は下記の通り開催致します。
日 時 6月26日(月)19時～
場 所 HAJルーム

事務所移転募金協力者ご芳名

10口～中岡久、5口～南勲、大西保、中村広
5月26日現在の累計額は、2,033,500円
(敬称略)

新しき土地の古道を行く(2)

イリからアルタイへ

岩崎 洋

その日は朝からついていなかった。真暗な中、あのいまましい北京時間に（新疆時間とはたしか4時間近くの時差があった）合わせて運行するバスに乗るために歩いて来たと言うのに、だいたい飲み過ぎて寝過ぎて以外、バスに乗れなかったのは後にも先にもその時だけだった。

バス停が近づくにつれて辺りがざわつきだし、バスが見えだした頃にはまわりの人混みに動く事も出来なかった。チケットを振り翳してバスに近付こうとしたが、生活のかかっている人々は手強い!!大きな荷物を持って右往、左往、ニワトリの入った籠、大きなトランク、風呂敷包み、泣きわめく子供達、すべてが混在し、それがまた、皆バスに乗ろうとしていた。

東から4日も5日も列車に揺られて来て、此処ウルムチから新疆各地の開拓地へ分け入って行く人々だ。一般的に金持ちではないだろう。生まれた土地で無い仕事を捜しているよりは、新しい土地で一旗揚げようと1人で家族をつれて、親をつれて、やって来た人々だ。

入口に辿り着いても人々が群がっていて取り付く島も無い。入口の攻防は熾烈を極め、人々は乗ったとたんに裏切り、今度は入ってくる人々を排除しようとする。キップなんて何の役にも立ちはしなかった。まして生活のかかっている、なんとなく中央アジアの西へ向かって流れると言うイリ河を見に行こうなどと言う旅行者が立ち入る隙など無くただボーゼンと、人の波をかき分けて出て行く、荷物と人民を満載したバスを見送るばかりだった。

しかし、私としても西へ流れるイリ河の土手にひねもす過ごし、少しでも満たされた気分になったかったのでバスに乗れなかった連中をかき分け、かき分け切符売り場に向かったのだが、其処もまた狂騒状態だった。切符売りのおねえさんは興奮

していて話を聞いてもくれない。もっとも冷静な時に話を通じる分けでもないのだが……。

とにかく切符を買っていたのだし、時間に遅れた分けでもないのだからなんとかせねばと、行っっては押し戻され、また押し返すといったような不毛で実りのない行為を繰り返しているうちに時間はどんどん過ぎて行き、イリ河は急激に遠くなっていった。

なんとかしなければ、荷物を持ってホテルへ帰る事になる。明日また来るなんて考えたくもないかったし、ポケットの中の切符が明日使えるとも思えない。素直に負けを認め「我、是、日本人」と一片の紙切れに書いて切符の代わりに差し出すと、彼女は一瞬驚いた様な顔をして私の方を見た。そして急に優しくなり中へ入れてくれた。彼女らもまさか人民の波に混ざって日本人がバスに乗ろうとしていたとは思っていなかったに違いない。白人なら直ぐに乗れたはずだ。背に腹は替えられないのでキップを見せて次のバスに乗せてもらっ



▲バザールの風景

た。人民と荷物に混ざって……。

天山北路は西域南路のようにのどかな所ではなかった。荷物満載のバスには東から来たばかりの漢族ばかり、それを宿や食堂で待ち構えているのは、一寸目付きの悪い連中、賭トランプ師とそのサクラ、スリ、置き引き。宿も食事も南疆の倍はある。たぶん彼らより一寸早く来ただけの人々なのに、後から来た人をカモにしよう。逞しいと言うか、寒々しいと言うか、見ていて気持ちの良いものではない。なにしろバスが停まる度に人々は賭けトランプにひっかかり、ケンカをし、そのどさくさにスリや置き引きが近よってくるのだからたまらない。天山北路は草原の道と呼ばれ、昔から豊かな土地だったと聞いたが、初日の心象風景は荒涼としたものとなってしまった。

セリム湖からイリへ向いダロイ渓谷を下って行く、湖の手前辺りからはのどかな、たぶん史記の時代から変わらないのであろう遊牧民の世界が広がっている、ハザック族だろうか、荷物を家畜に背負わせ、馬に乗って移動してゆく、時々草原の真中で車座になって、サモクールを囲み一服しているのも望まれる。昔何かの本で読んだ「私の家族は此处から北へ3日、其処にあるかまどの跡から西へ1日半の所に居ます」などと言う言葉が真実味を帯びて目前に広がっているようだ。

バスを降りて歩き出したい衝動を押えるのに少々時間が掛かった。歩き出してしまったらまた帰国が遅れてしまう。すでに北京を出てから2年半が過ぎていた。

長い事旅を続けていると潮時と言うか、なんとなく日本へ足が向く事がある。そういう時にそのまま足を進めれば数ヵ月後には日本に居たりする。足を出しそこねたらだいたい1年位は次の潮時はやってこない。そうやって何回か帰りそこねた事があるのは私だけではないと思うのだが……。

西に向かってはいたがなんとなくそれが帰り道であるような予感があったので、なるべくその道はずれないよう理性を働かすのであった。

バスはゆっくりと斜面に刻まれた道を下って行く、地図には果子溝と書かれていた、果物の谷と言う意味だろうか、変な表現だが良く手入れされた野性の果樹園といった風景が30km近く続き、や



がてハザックの土地、イリ盆地へと入って行った。

イリ地方は新疆ウイグル自治区の中でも一寸変わった雰囲気を感じ出している。一風変わったハザック族の住む土地だからだろうか、東、南、北を天山に囲まれ、西方、ロシアに向かって広らけていて、もちろん川も西へ流れている。

カシュガルから西域南路、そしてウルムチと寒くて乾燥した（冬ではあったが）土地ばかり歩いて来た私には湿潤で温暖で……とにかく鳥や虫の鳴く此の土地に来れた事がうれしくてならなかった。

いつも初めて着いた街では2～3日は朝から夕方迄バザールとか小さな路地をウロウロして面白そうな店とか、人が集まっている食堂などをチェックして廻ることにしている。食堂に入って目新しいものを注文したり、店先にすわって色々と面白そうな情報を集めたり。見たり聞いたり、歩けば歩く程面白い物や楽しい事に会える。

ある日バザールの食堂で、イリ地方を象徴したような食べ物に出会った。その名を混沌と言う。さっそく注文すると、水ギョーザの小さいのとラビオリ、それとシャクパ、どれにも似ているが、どれでもない、文字通り混沌としたスープが出て来た、これがなかなか美味で、後日色々な土地で同名のものを頼んでみたが、初めて食べたイリのものが最高だったと思っている。強烈な個性は無

いが、皆混じり合っていていい味を出していた。

多民族、多言語、多宗教の土地である、新疆ウイグル自治区じたいがそうであるが、イリ地方は一際ぬきん出ている。それが調和して此の地の雰囲気を作り出しているのであろう。私も皮のパイロットジャンパーを着て、アフガン帽を被り、歩いていたら日本人に西藏人呼ばわりされてしまった。彼女は私が日本語を話したのに驚きつつ笑いころげ、私はそのおわびにとワインを1本せしめた。色々な人々の住む土地なのである。

天山より流れ出しバルハシ湖に注ぐイリ河をひねもす眺め、中央アジアに来る迄不思議で神秘的だった海へ流れて行かない大河を見ながら、ロシア側へと思いを馳せ、美しい夕日を見送り、ホテルへの帰り道にはもうホルゴスへ行く事を決めていた。伊寧も気に入っていたのだが、カシュガルで越冬した後だった事もあり、10日程で出発する事になってしまった。

何ヵ月も同じ所に滞在する事もあれば、先へ先へと駆り立てられるように旅が進んで行く事もある。好きとか嫌いとか、時間とかお金とかの有無に関係なく、もっと別の所に旅のサイクルはあるようだ。

翌日、適当に車をひろい、伊寧を後にした、長距離以外はいきあたりばったり、同じ方向で乗れるものならなんでも乗って行く事にしているので、時々歩くのより遅い牛車とか、歩くのより疲れる自転車とか、とんでもないものをつかまえてしまったりするが、たいていは車、トラック、トラクター、耕運機、などで、進まなければ、進まない分、面白い事に出合う事が多い。

伊寧ーホルゴスーセリム湖ー奎屯ーカラマイーアルタイと乗り継ぎ乗り継ぎ、カメのように歩いた。

ホルゴスでは、1泊した翌日国境の番人以外だれも居らず、車も来なくて、何をするでもなくボケーとしていた所、彼らもひまなのか寝ころがっていた私の方へ歩いて来る、当時中ソ関係はうまく行っていたようで、ソ連からは大型のトラックが荷物を満載してカスタムにならんでいた。

「おい何してる」

「車を待っているんだ」

「向こうへ行かないのかい？」

「ビザが無くてね」

「カメラ持ってる？」

「持ってるよ」

「じゃあロシアをバックに撮らないか」

「エ？いいの？」

そんな分けでこの、のどかな国境では写真撮り放題であった。監視塔や国境をバックに写真を撮ったのは此処くらいである。

陽が西に傾きかけた頃、国境の向こうからロシア人のウイグル族とかハザック族らしい人々が大量やって来た。中国人のウイグル族とかハザック族の親類を尋ねるのであろうか、たくさんの荷物を持って、オシャレをして少々緊張ぎみの顔をしている、すかさず話しかけ（ほとんど通じないが）途中迄乗せてもらった。

このような土地では困っている時でもまずみずてられる事はない。厳しいがあたたかい土地である。

その日は伊寧との分析迄、30kmにも満たない距離だった。その先セリム湖までトラックのヒッチをしようと試みたがだめだった。絶対的な車の量が少ないので、自分の思う所へ行く車を捜すのは大変だが、地元の人も結構同じようにしてトラクターやトラックに乗っているので、お茶を飲みながら「あんた何処行くの」とか「何処から来たの」とか、たわいもない会話で時間は過ぎて行く、その中に同じ所へ行く人が居ればもう着いたも同然だ、くっついて行けばよいのだから。

北疆には大量の漢族が流入しており、バス、宿、食堂みな大混雑で、公安も紛れ込んだ日本人1人くらいどうでもいいらしく、何処でも行けるし、泊まる事が出来た。ちょうど、新疆が各地方を開放しはじめた時期でもあり、色々面白くて興味深い旅が出来たと思う、ジュンガル盆地をアルタイ迄行き、それを最後に中央アジアを後にした。天は穹廬に似て

四野をおおう

天は蒼々

野は茫茫

風吹き、草をれて、牛羊をみる

(26・MAY・'95)

1-5 コングール(公格尔・Kongur)

- * 山脈: パミール山脈の最高峰。
- * 位置: カシュガル(1289m)の南西約180km。
[38° 40' N、75° 20' E]
- * アプローチ: カシュガルまでは飛行機で2時間の旅。北面も南面もBCまではジープ半日とラクダ一日でBC地に到達できるが、増水の状況で多少変化する。
- * ルートの所要日数: 81年イギリス隊は、一度南稜から主稜線の7200mのコルまで登ったが、その先が困難なため西稜から一旦BCに降りた。2回目は西稜のルートから頂上ピラミッド下の雪洞まで4日で到達したが、悪天のためこの雪洞で3日停滞。翌日登頂。
- * 山の概念: 主峰7719m(中国登山指南では7649m)。北東峰7625m。西には7222m、7245m、7126m、南稜上に7201mの各峰があるが、イギリス隊が全て初登頂している。主峰の3.5km北東7204m峰がある。また、南稜からコクセル・コル(5840m)を挟んで南にコクセル(6715m)、カジセル(6525m)、サリヤチ(6220m)などがある。また、主峰の南東にはシワクテ山群やチムガン山群があり山脈は小振りながら未知の要素の残る地域である。
- * 通常の登山時期: 6月~7月の夏期。
- * 山名: ウイグル語で「ラシャの帽子」の意。
- * 小史: コングールはかつて、コングールⅡと呼ばれていた。Ⅰは現在のコングール・チュビエである。標高の低いチュビエがⅠ峰と呼ばれたのは、タシュクルガンへ向かう道のすぐ側に聳えているためであろう。現在のコングールはその東の奥にある。

1980年の対外開放までに登山の歴史は全く無い。調査の記録としては、当時カシュガルのイギリス総領事であったスクラインが1922年から24年に東面に入り山群の全容を把握した。それを基にメイスンが地図を作成した。

開放後の1980年にイギリスと日本が偵察に入ったのが、登山記録としては初めてであった。

- * 参考文献: 中国の高峰[東京新聞出版局/中国人民体育出版社 1981年刊] 岳人400号
[東京新聞出版局 昭和55年刊] 人民中国354号 1982年12月号]

登山の概要

■ 主峰(7,719m)

1980年

5月~6月 南面&北面の偵察 イギリス隊翌年の本番のために3名で偵察に入る。6月13日南面コクセル氷河4400mにBC設営。18日にボニントンとルースがサラユグキー峰(6200m)[サリヤチ峰(6220m)のこと]に初登頂。ウォードとボニントンが29日コクセル・コルまで登り南稜を偵察した。その後北面に入り、7月11日ウォードとボニントンがカラタシュ・ピーク(5400m)[5361m]に初登頂して北側を偵察、西稜からの登頂が可能性の高い事を確認した。

[隊長: マイケル・ウォード(54) クリス・ボニントン(45) アラン・ルース(28)]

7月~8月 南面&北面の偵察 京都KC翌年の本番のために4名で偵察に入る。8月1日南面のイギリス隊と同じ場所にBC設営。6日土森、武藤、城崎がコクセル・コルに立ち南稜を偵察。その後北面に入り、16日左岸5200mピークに登り、北面の偵察を行った。

[隊長: 塚本圭一(49) 土森譲(43) 武藤英生(31) 城崎英明(22) 他南面BCへ3名]

1981年

5月~7月 南稜&西稜 イギリス隊初めに南稜と西稜の試登を行い、南稜からはアルパイン・スタイルでアタック。メンバーは、クリス・ボニントン、ピーター・ボードマン、ジョー・タスカ、アラン・ルースの

4名。6月23日BCを出発、コクセル・コルを経て27日に西稜に出て頂上ピラミッド下に雪洞を掘る。翌日頂上に向かうも状態が悪く中止し、西稜経由で下山した。2回目は7月4日にBCを出発し、西稜を経由して6日に前回のピラミッド下に着いたが、嵐に挟まり雪洞で停滞。12日アタックに出て初登頂に成功。頂上直下で泊まり、北東峰が高そうに見えたのでこれを往復したが、主峰の方が高かった。西稜経由で下山した。

〔隊長：マイクル・ウォード (55) クリス・ボニントン (46) ピーター・ボードマン (30) ジョー・タスカー (32) アラン・ルース (29) チャールズ・クラーク (36) ジェームス・ミレッジ (50) エドワード・ウィリアムズ (57) ジム・カラン

7月 北稜 京都カラコルムクラブ
アルパイン・スタイルを用いて登攀する3名は、7月14日3500mのBHを出発した。カラヤイラク氷河から北稜に取りつき、23日午

前11時頃北稜上部の大雪壁6500m付近にいるのを確認されて以後消息を絶った。

〔 嶋満則 (36) 寺西洋治 (36) 松見新衛 (35) 〕

〔 コンゲール7719mの光と影 (岩と雪85号 昭和56年12月刊) 〕

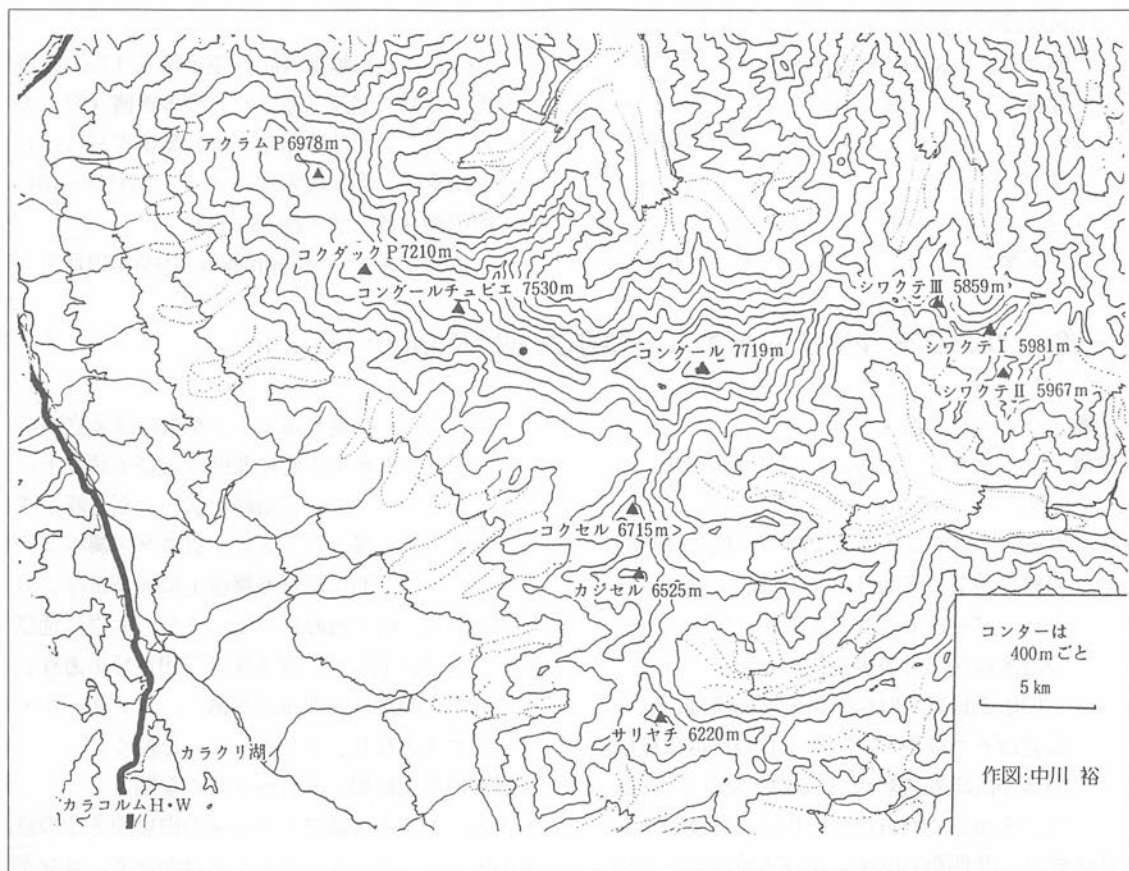
7月～8月 東稜 京都カラコルムクラブ
別動隊は東稜のジャンクション・ピーク (5975m) から、北に派生している稜線にルートを取ったが、ナイフ・エッジに苦しめられ悪天やチームワークの悪さに北稜のアクシデントも重なり、5400mで断念した。

〔 隊長：高田直樹 (44) 小谷隆一 (56) 土森譲 (44) 安田越郎 (32) 武藤英生 (32) 城崎英明 (23) 二上純一 (29) 〕

〔 同上 〕

1982年

8月 南面 アメリカ隊
イギリス・ルートに取りついたが気温が異常に高く、西稜のコルまで到達したところで、



時間切れとなり断念した。

〔隊長：リチャード・ディーツ他〕

1983年

6月 北稜 アメリカ隊

行方不明となった日本隊の右の稜から取りつき、アルパイン・スタイルでの登頂を試みた。6858mまで4名が到達したが、エドとマットはここから引き返した。翌25日イアンとディックの二人が、イギリス隊が雪洞を掘った7315m付近まで到達したが、疲労と凍傷のため頂稜アタックを諦め下降した。

〔隊長：イアン・ウェード、マット・ウェルズ、ディック・モース、エド・ニューヴァイル〕

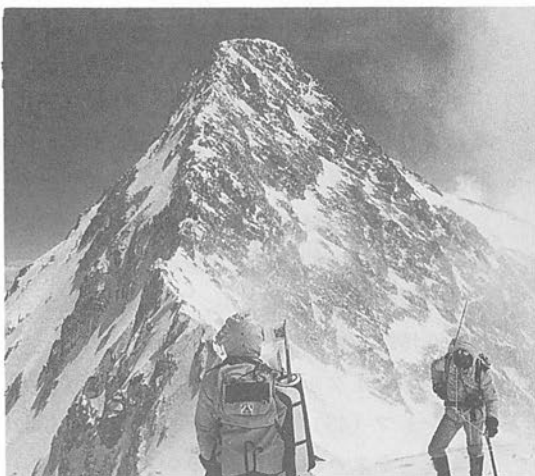
1986年

6月～7月 南面 アメリカ女性隊

8名の女性だけの登山隊がイギリス・ルートからの登頂を目指して入山した。6月16日4500mにBCを設営したが、不調者が続出し上部は、隊長、ナンシー、パット、カローラの4名だけの行動となった。7月10日C2を6400mに設営したが、連日の降雪で何回も雪崩に襲われ、以後の活動を断念した。

〔隊長：ケイティ・ギール(33) ナンシー・ゴホース、キャシー・ニルソン、パット・ディリングハム、ジョン・プロベンチャー、ナンシー・フィッツシモンズ・ブルーム、デブ・ブラニアン、スザンナ・ホップキン、カロー

▼コングール頂上岩壁(イギリス隊)AAJ・Vol24より転載



ラ・ベティエット〕

1989年

5月～7月 北稜 京都カラコルムクラブ

6月4日カラヤイラク氷河の標高3600mにBC設営。30日傘岩を突破しBCに下山。7月7日3チームでアタックに出発。11日須藤チームを皮切りに3チームが順次登頂に成功した。

〔隊長：安田越郎(40) 須藤建志(39) 武藤英生(40) 堀淳二郎(37) 榎本幸博(33) 吉村千春(30) 仲藤和弘(27) 高橋省吾(25) 友田幸一(35) 塚本圭一(58) 小谷隆一(64) 原田修(39) 清水朝一(59)〕

〔1989コングール峰登頂報告(1989年10月刊)〕

1-6 コングール・チュビエ(公格尔九別 Kongur Tiubie)

*山脈：パミール山脈

*位置：カシュガル(1289m)の南西約180km。

〔38° 40' N、75° 15' E〕

*アプローチ：カシュガルまでは飛行機で2時間の旅。通常の南面BCまでは、ジープ半日とラクダ一日で到達できるが、各氷河からの増水の状況で多少変化する。

*ルートの所要日数：81年防衛大学校隊は、BC設営後6つのキャンプを出し45日目に登頂。89年の宮崎岳連隊は、BC設営後4つのキャンプを出して27日目に6510mに到達した。

*山の概念：北西から南東に延びる稜線上に七千

メートルを越えるピークが数座聳え立つ。

主峰7530mを中心に北西に延びる稜線上に肩というべき7212m峰、次いで双耳峰を成す7210m峰と7129m峰。更にゲズ渓谷に向かって北西に延びる稜線上に6978m峰、6786m、6662m峰がある。また、南東に延びる稜線上には、双耳峰の7229m峰があり、更に南東に6982m峰があり、コングール・コルとなり、コングールへと続く。

*通常の登山時期：6月～8月の夏期。

*山名：キルギス語で「ラシャの白い帽子」の意。

*小史：コングール・チュビエはかつて、コング

ールⅠと呼ばれていた。Ⅱは現在のコングールである。標高の低いチュビエがⅠ峰と呼ばれたのは、タシュクルガンへ向かう道のすぐ側に聳えているためであろう。

1956年中国と旧ソ連の合同登山隊は、ムスターグ・アタに初登頂した後、クジミンをリーダーとして8名がコングール・チュビエ登山に入り、8月15日に南面から初登頂に成功した。

*参考文献：中国の高峰〔東京新聞出版局／中国人民体育出版社 1981年刊〕 岳人400号
〔東京新聞出版局 昭和55年刊〕 人民中国356号 1983年2月号〕

登山の概要

■ 主峰（7,530m）

1956年

8月 南稜 中国&旧ソ連合同隊

ムスターグ・アタ登頂を終えた中国2名と旧ソ6名の合計8名は、8月12日カンシビエル河（コンシバー河）を渡って南面に入り7000mに到達し、16日午後3時初登頂に8名全員が成功した。結果的にはアルパイン・スタイルによる登頂となった。

〔旧ソ連側、隊長：K.K.クジミン、V.I.ポタポフ、B.L.ルコデレニコフ、E.I.イワノフ、W.P.シビルジャコフ、P.S.ラチモフ。中国側、陳栄昌、彭仲穆2名〕

1961年 西稜 中国女性隊&支援隊（男）

5月～6月 コングール・チュビエの登頂を目指す12名の女性登山隊が組織された。強力な男性の支援隊と共に行動した。偵察を終えて5月16日入山。当初は1956年隊と同じルートを用意していたが、南稜から西稜に出るルートを登ることになった。4600、5500、6200、6800mにキャンプを出し、6月16日15名が最終キャンプとなる7300mに到達。翌17日に頂上アタックを行ったが、体調不良者が脱落、天候も悪い中登り続け、21時30分に頂上直下30mに到達。ここで陳栄昌ら5名が断念。シーラオ、バンドウ女性2名と陳三、拉巴才仁、宗岳の男性3名が頂上を目指し、22時30分登

頂に成功した。19日下山途中7200m付近で衛虎林がクレバスに転落して死亡。7100m付近でシーラオ、穆炳鎖、拉巴才仁、陳宏基の4名が雪崩に襲われ死亡した。

〔女性隊隊長：袁揚（27）シーラオ（28）バンドウ（23）王義勤、チャムチン、胡琳（33）叢珍、王貴華、齊米、李長旺ら12名〕

〔支援隊隊長：陳栄昌、穆炳鎖、拉巴才仁、陳洪基、衛虎林、張祥、陳三、楊德有、曾曙生、郭寿旺、衛宗岳、文传甲、鄧嘉善、雷耀栄、王振華、趙宗湿、楽学富、劉大義、多吉甫、羅仕明、陳雷生、馬履升ら多数〕

1981年

6月～8月 南稜 防衛大学校山岳会

7月4日BC設営。C4へのルー工作終了時から悪天となる。8月7日7250m地点のC6へのルート工作を終えてC3へ下山。18日山口陽一郎、古賀重行がアタックを行い、午後1時29分登頂に成功した。

〔隊長：川上隆（53）木村清順（38）安藤千年（38）山口陽一郎（31）細島邦夫（30）古賀重行（29）山本洋（26）清藤隆雄（32）佐藤治（32）加藤譲（25）大口俊博（29）関根孝志（30）永納和子（26）〕

〔コングール・チュビエ峰登頂 山岳第七十七年（1982年12月刊）〕

1989年

7月～8月 南稜 宮崎県山岳連盟

7月16日BCを設営。8月10日に6200mにC3を出す。15日6510mに到達するも、物資の不足に加えて上部ルンゼの状態が悪いことなどから登頂を断念した。

〔隊長：鳥井修一（46）一宮繁紀（48）成崎公生（43）渡辺文男（43）長友利憲（43）尾形仁巳（38）橋井参二（33）山崎千鶴子（34）井上徹（22）直野淳（22）河野州昭（35）

〔中国西域コングール・チュビエ峰 1989年登山対報告書（1990年刊）〕

■ 寸 感 ■

生活環境が大きく変って、3ヶ月がアッと云う間に過ぎ去った。ゴールデン・ウィークに剣岳へ出かけ、精一杯リフレッシュしてきた。山の良さがまた一段と深く味わえた。これまでのように焼けるにまかせる訳にはいかず、入山中は日焼止めクリーム化粧が大変上手になった。これも今までになかった変化である。天候に恵まれ、十分に日本の春山の良さを満喫して帰ってきたら、悲報が待ちうけていた。

アダムス・カーター氏が亡くなられたと云う。咄嗟に今後のAAJの行末を思った。35年もの長きにわたって編集に携われてこれただけに後継者が心配になるのである。かの「インディアン・マウンテンアー」もモトワニ氏亡き後、随分と変ってしまった。

前号「合同追悼会開かる」の記事を、4君のスナップ映写の説明は、渡辺斉副隊長が行い、参加者は、隊員3名と4家族を含む約200名と訂正します。関係各位に大変ご迷惑をおかけしました。

事務局日誌(5月)

- 12日(火) ヒマラヤ283号発送
キンヤン・キッシュ隊壮行会
- 15日(月) ミニヤ・コンカ訪中団ビザ申請
- 19日(金) キンヤン・キッシュ先発隊出発
ミニヤ・コンカ訪中団出発
- 25日(木) ミニヤ・コンカ訪中団帰国
- 27日(土) 理事会&定時総会
- 28日(日) ミニヤ・コンカ隊反省会
- 29日(月) 東京集会(7名)

ヒマラヤ No.284 (7月号)

平成7年6月10日印刷 7年7月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる旅



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク

TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル4階 ☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004